

令和5年度 平野中学校のあゆみ —結果概要とその分析から見えてきた成果・課題と今後の取組について—

大阪市教育委員会では、保護者や地域の皆様に説明責任を果たすことが重要であると考え、より一層教育に関心をお持ちいただき、教育活動にご協力いただくため、学校が各調査の結果や各調査結果から明らかになった現状等について公表するものとしています。

本校でも、各調査結果の分析を行い、これまでの成果や今後取り組むべき課題について明らかにし、本市教育委員会の方針に則り公表いたします。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。

1 「全国学力・学習状況調査」の調査の目的

義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。さらに、そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2-1 「中学生チャレンジテスト」の調査の目的

- (1) 大阪府教育委員会が、府内における生徒の学力を把握・分析することにより、大阪の生徒課題の改善に向けた教育施策及び教育の成果と課題を検証し、その改善を図る。加えて、調査結果を活用し、大阪府公立高等学校入学者選抜における評定の公平性の担保に資する資料を作成し、市町村教育委員会及び学校に提供する。
- (2) 市町村教育委員会や学校が、府内全体の状況との関係において、生徒の課題改善に向けた教育施策及び教育の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、そのような取組を通じて、学力向上のためのPDCAサイクルを確立する。
- (3) 学校が、生徒の学力を把握し、生徒への教育指導の改善を図る。
- (4) 生徒一人ひとりが、自らの学習到達状況を正しく理解することにより、自らの学力に目標を持ち、また、その向上への意欲を高める。

2-2 「大阪市版チャレンジテストplus」の調査の目的

- (1) 生徒及び保護者が、学習理解度及び学習状況等を知り、目標をもって主体的に学習に取り組めるようにする。
- (2) 学校が生徒一人ひとりの学力を的確に把握し、学習指導の改善及び進路指導に活用する。
- (3) 学びの連続性を確立する観点から、客観的・経年的なデータを把握、分析し、効果的な指導方法や課題を「見える化」し、その改善に役立てる。

3 「大阪市英語力調査（GTEC）」の調査の目的

- (1) グローバル社会において活躍し貢献できる人材の育成をめざし、生徒の英語力の充実・向上を図るため、本市教育振興基本計画に基づき、生徒に求められる英語力や学習の習熟過程等を把握・検証する。
- (2) 生徒が自らの英語力を的確に把握するとともに、生徒の英語力の実態を分析することにより、各学校における学習指導の充実や改善、工夫に役立てる。

4 「全国体力・運動能力、運動習慣等調査」の調査の目的

- (1) 子供の体力・運動能力等の状況に鑑み、国が全国的な子供の体力・運動能力の状況を把握・分析することにより、子供の体力・運動能力の向上に係る施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- (2) 各教育委員会、各国公私立学校が全国的な状況との関係において自らの子供の体力・運動能力の向上に係る施策の成果と課題を把握し、その改善を図るとともに、そのような取組を通じて、子供の体力・運動能力の向上に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。
- (3) 各国公私立学校が各児童生徒の体力・運動能力や運動習慣、生活習慣、食習慣等を把握し、学校における体育・健康等に関する指導などの改善に役立てる。

令和5年度 平野中学校のあゆみ —結果概要とその分析から見てきた成果・課題と今後の取組について—

1 全国学力・学習状況調査

学年 実施月日		生徒数 (人)	平均正答率(%)			平均無解答率(%)		
			国語	数学	英語	国語	数学	英語
3 年	学校	143	67	50	44	4.9	9.7	8.1
	大阪市	—	67	49	44	5.2	11.0	6.6
4月18日	全国	—	69.8	51.0	45.6	4.6	9.6	5.7

2 中学生チャレンジテスト

学年 実施月日		生徒数 (人)	平均点(点)					平均無解答率(%)				
			国語	社会※	数学	理科※	英語	国語	社会※	数学	理科※	英語
3 年	学校	124	60.8	48.9	52.2	39.9	51.3	12.2	4.8	11.3	11.1	7.7
	大阪市	—	62.3	54.2	51.9	47.8	54.3	9.9	2.9	10.6	8.0	6.2
	大阪府	—	62.1	54.7	52.2	47.6	54.2	10.3	3.1	11.2	9.0	6.5
2 年	学校	136	63.5	50.1	49.8	42.4	51.9	9.8	4.2	13.3	11.6	11.5
	大阪市	—	66.7	54.6	52.2	39.8	57.2	8.2	3.2	11.2	11.1	8.6
	大阪府	—	66.8	54.2	52.2	40.3	57.1	8.3	3.5	12.0	11.8	8.9
1 年	学校	122	55.3	50.3	50.2	58.7	60.6	11.8	6.9	10.7	2.1	5.0
	大阪市	—	60.6	56.0	55.4	62.2	64.1	8.7	5.2	9.1	1.9	4.3
	大阪府	—	60.8	—	54.7	—	64.1	9.6	—	10.3	—	4.9

※ 1年生の社会・理科については、「大阪市版チャレンジテストplus」として実施

※

※

※ 3年生の理科はC問題を選択

3 大阪市英語力調査 (GTEC)

学年 実施月日		生徒数 (人)	読むこと 【リーディング】	聞くこと 【リスニング】	書くこと 【ライティング】	話すこと 【スピーキング】
			(スコア)	(スコア)	(スコア)	(スコア)
3 年	学校	131	98.5	107.6	134.4	102.4
	大阪市	—	101.3	107.7	137.9	102.2

4 全国体力・運動能力、運動習慣等調査

学年	生徒数 (人)	握力	上体 起こし	長座 体前屈	反復 横とび	20m シャトル ラン	持久走 男子1500m 女子1000m	50m走	立ち 幅とび	ハンドボール 投げ	体力 合計点
	124	(kg)	(数)	(cm)	(点)	(回)	(秒)	(秒)	(cm)	(m)	(点)
2 年 男 子	学校	27.41	24.72	32.22	49.57	73.34		8.08	184.29	18.48	36.11
	大阪市	28.62	26.21	42.04	51.65	79.05		8.05	194.78	19.88	40.79
	全 国	29.02	25.82	44.16	51.22	78.07		8.01	197.02	20.40	41.32
2 年 女 子	学校	23.03	20.07	40.07	42.99	47.38		8.93	154.92	10.81	42.55
	大阪市	23.11	22.12	44.78	46.25	52.11		9.03	165.29	12.10	46.99
	全 国	23.15	21.62	46.27	45.65	50.70		8.95	166.34	12.43	47.22

調査結果から

全国学力・学習状況調査結果

【生徒質問紙の回答結果について】

起床・就寝・朝食の有無については、全国と比較しほぼ大差なく、80%程度の生徒は基本的な生活習慣が身についている。しかし、平日、週末において自分で学習の計画を立てて家庭で学習する生徒の割合は40%を下回っており、今年度も家庭学習が定着していない生徒の割合が高い傾向が続いている。

将来の夢や目標を持っている生徒や、人の役に立つ人間になりたいと思っている生徒の割合は全国平均を上回る結果となっていることから、進路指導を通して自己の進路について見通しを立てて主体的に考える力を伸ばし、進路実現のための家庭学習の具体的な進め方を丁寧に指導していく必要がある。

【各教科の成果と課題、今後の授業改善に向けて】

いずれの教科も全国平均正答率には及ばなかった。しかし、大阪市の平均正答率を下回ることなく、経年比較をすると緩やかではあるが生徒の学力は上がりつつある。授業で言語活動に重点を置いた学習を繰り返し行い、知識・技能のさらなる定着を図り、思考・判断・表現の力の向上につながる学習や課題の設定の工夫を行なうことで、記述式問題に対する苦手意識を克服していく。

国語

全体を通して、普段での授業の取組や家庭学習の結果が表れていた。評価の観点における知識・技能の正答率は全国平均を下回っていたが、言語の特徴や使い方に関する事項の問題では、全国平均を大きく上回っていた。毎授業での漢字テストや学校で全員が日本漢字能力検定を受験した成果と考えられる。「読むこと」に関する問題では、観点を明確にして文章を比較する問題や情報と情報の関係について読み取る問題の平均正答率が低く、複数の文章や資料を読み取り、要点をとらえて判断する力に課題あることがわかった。言語活動を通して、読解力を伸ばしていきたい。記述問題については苦手意識が強いため、普段から文章を書く課題を多く設定してきたが、今後は具体的な根拠をもとに書いたり、話したりする表現活動を工夫していきたい。

数学

全体的には、毎日の頑張りが反映された結果となっている。授業はもちろんのこと、宿題、放課後学習会への参加、毎日の家庭での取り組みなど様々な普段の学習活動の結果ととらえている。設問別では、4領域「数と式」「図形」「関数」「データの活用」のそれぞれにおいて大きく上回った設問と大きく下回った設問があり、得意な問題とそうでない問題との差が大きい結果となった。今後、苦手な問題にも理解が深まるように時間をかけて取り組んでいく習慣をつけたい。また、正答率が少し低かった「データの活用」については、今後の「標本調査」の単元を学習する授業時間や宿題を通して機会あるタイミングで復習を図りたい。

英語

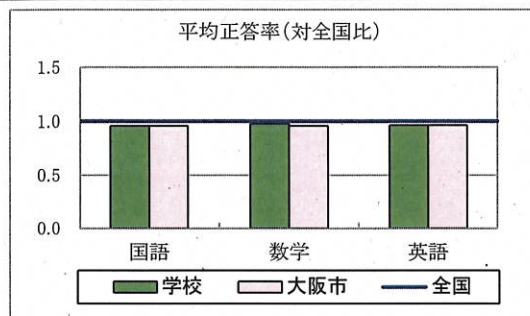
平均正答率では全国平均を下回ったものの、評価の観点における知識・技能や問題形式の短答式においては全国平均の正答率を上回っている。小テストや語彙の課題が成果として表れていると考えられる。しかし、選択式や短答式の無回答率と記述式問題の無回答率を比較すると、記述式の無回答率は20%を超えている。また、学習指導要領の領域においても、聞くこと、読むことは市平均より上回っているが、書くことの問題は市平均を下回っている。日常的な話題や社会的な話題など、書きやすい課題を設定し、自分の考えやその理由等を順序立てて表現する力をつけていきたい。「話すこと」調査においては全ての問題で全国平均を下回っている。C-NETの授業だけにとどまらず、英語を話す活動を普段から取り入れ、やり取り(即興性)や発表する力をつけていきたい。

令和5年度 平野中学校のあゆみ
—結果概要とその分析から見てきた成果・課題と今後の取組について—

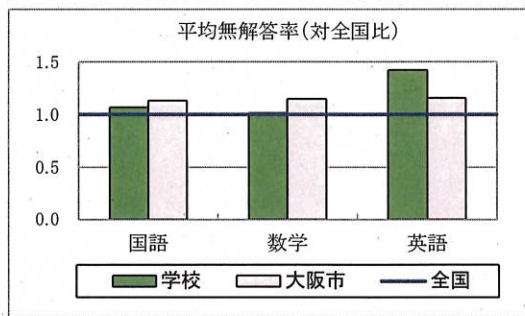
全国学力・学習状況調査 教科に関する調査より

【 全 体 】

	平均正答率(%)		
	国語	数学	英語
学校	67	50	44
大阪市	67	49	44
全国	69.8	51.0	45.6

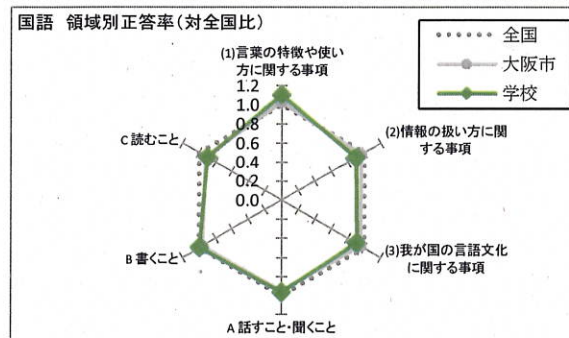
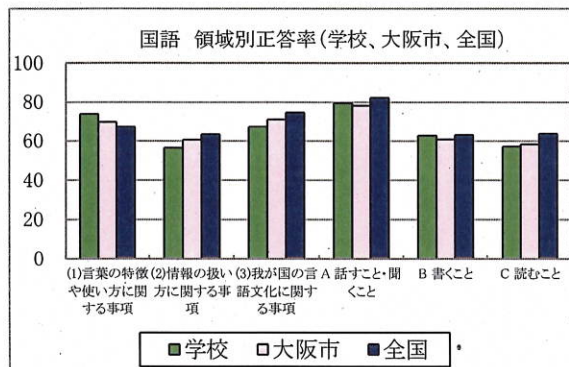


	平均無解答率(%)		
	国語	数学	英語
学校	4.9	9.7	8.1
大阪市	5.2	11.0	6.6
全国	4.6	9.6	5.7



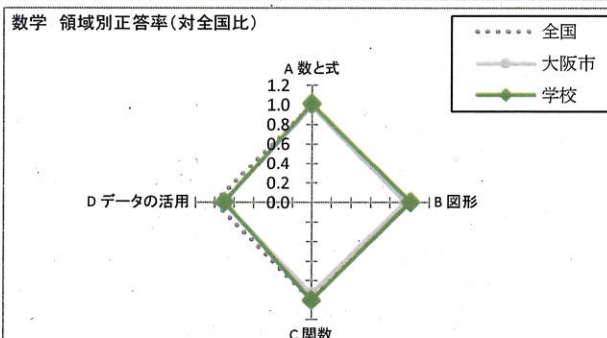
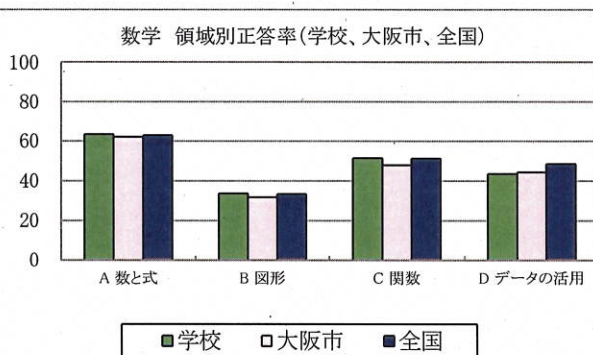
【 国 語 】

学習指導要領の 内容	対象 設問数 (問)	平均正答率(%)		
		学校	大阪市	全国
(1)言葉の特徴や使い 方に関する事項	2	74.1	69.8	67.5
(2)情報の扱い方に 関する事項	2	56.6	60.7	63.4
(3)我が国の言語文化 に関する事項	3	67.4	71.1	74.7
A 話すこと・聞くこと	3	79.5	78.2	82.2
B 書くこと	2	62.9	60.8	63.2
C 読むこと	4	57.2	58.5	63.7



【 数 学 】

学習指導要領の 領域	対象 設問数 (問)	平均正答率(%)		
		学校	大阪市	全国
A 数と式	5	63.4	62.1	63.0
B 図形	3	33.6	31.7	33.2
C 関数	4	51.4	47.8	51.2
D データの活用	3	43.6	44.2	48.5



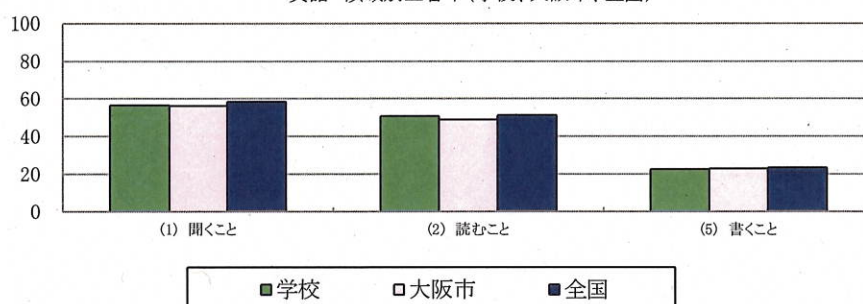
令和5年度 平野中学校のあゆみ
—結果概要とその分析から見てきた成果・課題と今後の取組について—

全国学力・学習状況調査 教科に関する調査より

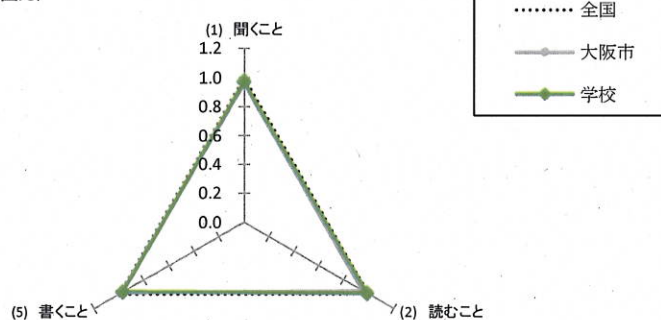
【英 語】

学習指導要領の 領域	対象 設問数 (問)	平均正答率(%)		
		学校	大阪市	全国
(1) 聞くこと	6	56.4	56.0	58.4
(2) 読むこと	6	50.6	48.9	51.2
(3) 話すこと[やり取り]	0			
(4) 話すこと[発表]	0			
(5) 書くこと	5	22.7	22.9	23.4

英語 領域別正答率(学校、大阪市、全国)



英語 領域別正答率(対全国比)



令和5年度 平野中学校のあゆみ —結果概要とその分析から見てきた成果・課題と今後の取組について—

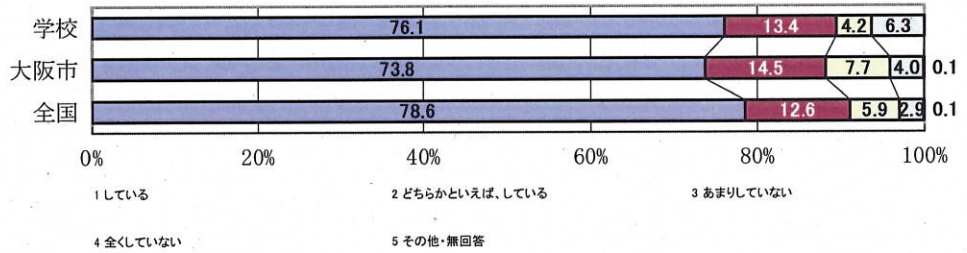
生徒質問紙より

1 2 3 4 5 6 7 8

質問番号
質問事項

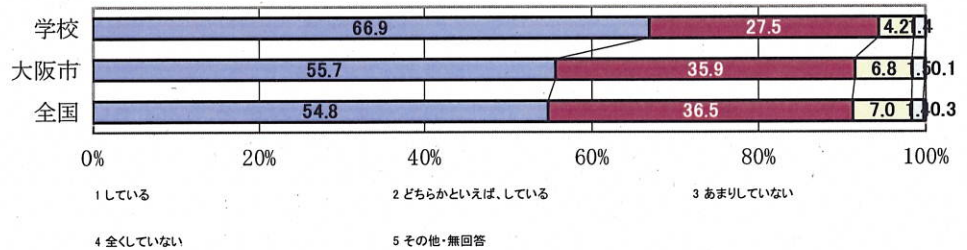
1

朝食を毎日食べている



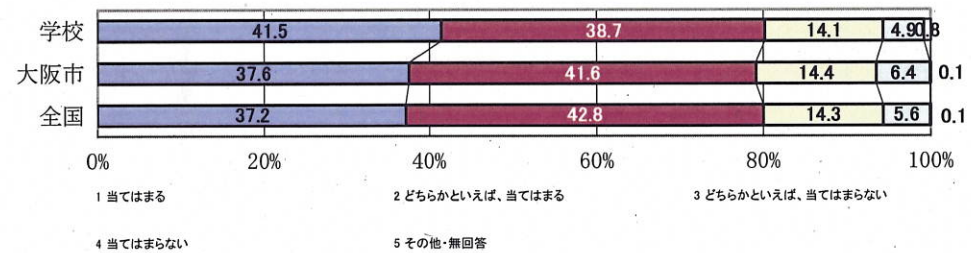
3

毎日、同じくらいの時刻に起き
ている



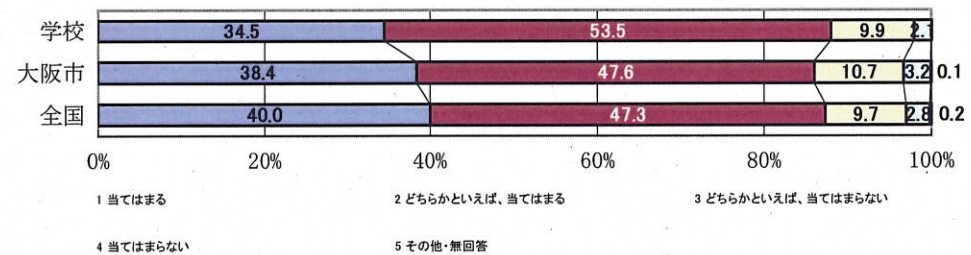
4

自分には、よいところがある
と思う



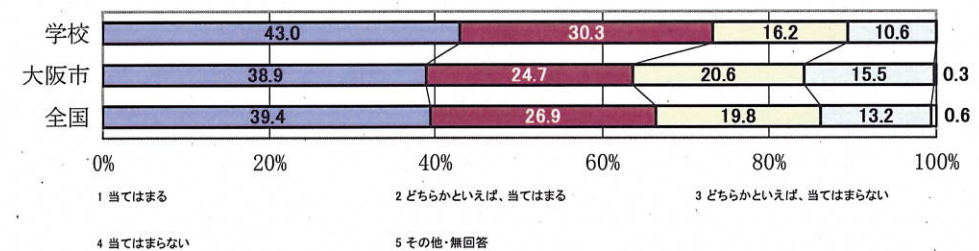
5

先生は、あなたのよいところを
認めてくれていると思う



7

将来の夢や目標をもっている



令和5年度 平野中学校のあゆみ —結果概要とその分析から見えてきた成果・課題と今後の取組について—

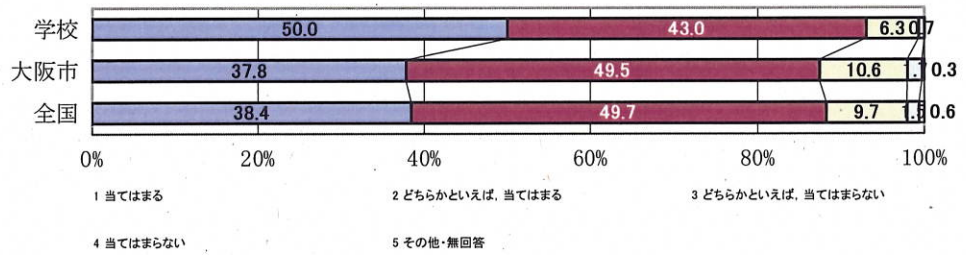
生徒質問紙より

1 2 3 4 5 6 7 8

質問番号
質問事項

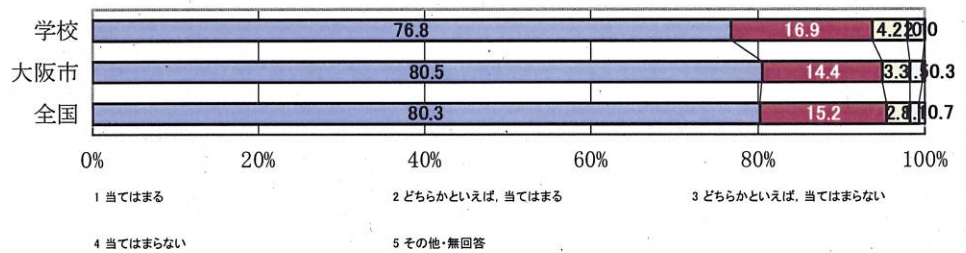
8

人が困っているときは、進んで
助けている



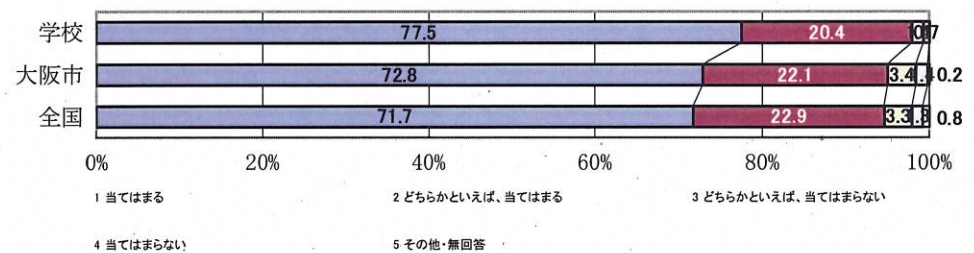
9

いじめは、どんな理由があっても
いけなないことだと思う



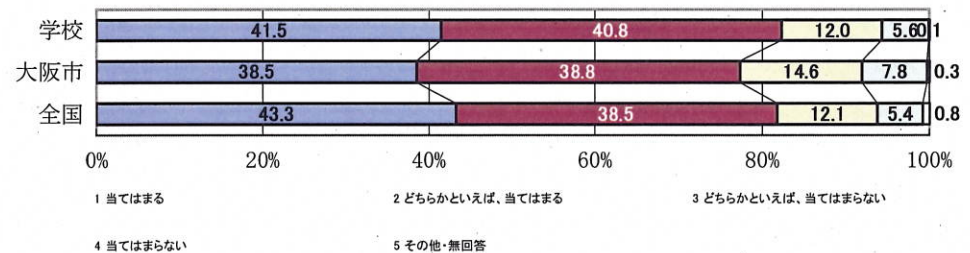
11

人の役に立つ人間になりたい
と思う



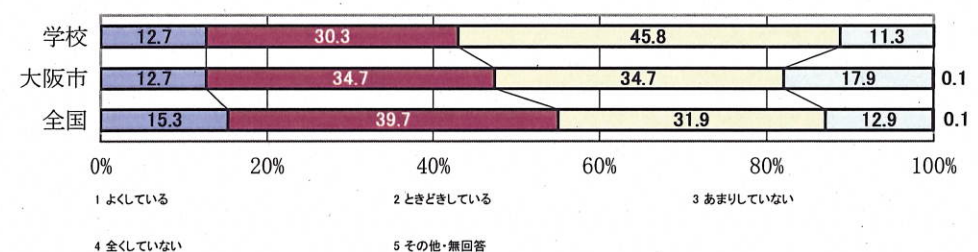
12

学校に行くのは楽しいと思う



16

家で自分で計画を立てて勉強
していますか(学校の授業の
予習や復習を含みます)



令和5年度 平野中学校のあゆみ —結果概要とその分析から見てきた成果・課題と今後の取組について—

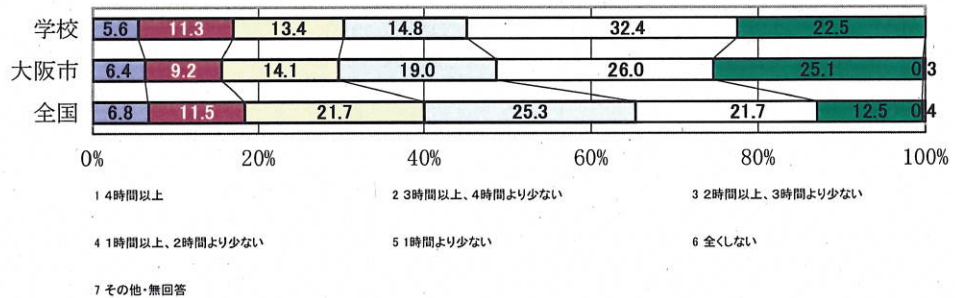
生徒質問紙より

1 2 3 4 5 6 7 8

質問番号
質問事項

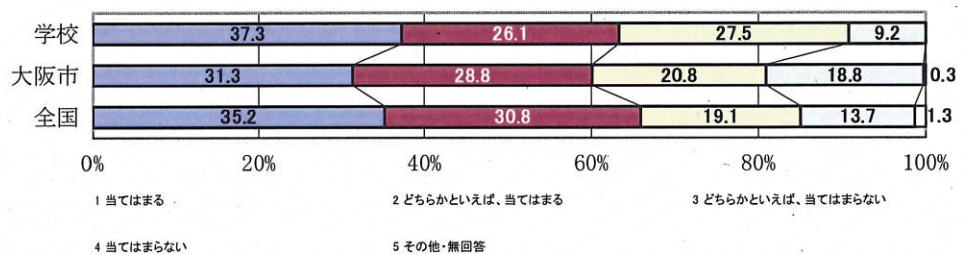
18

土曜日や日曜日など学校が休みの日に、1日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか(学習塾で勉強している時間や家庭教師の先生に教わっている時間、インターネットを活用して学ぶ時間も含みます)



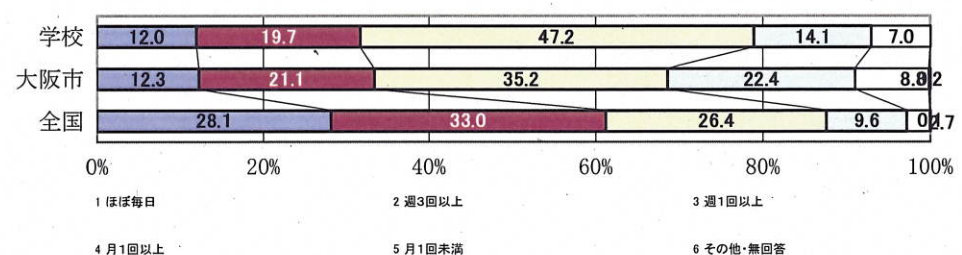
24

読書は好きですか



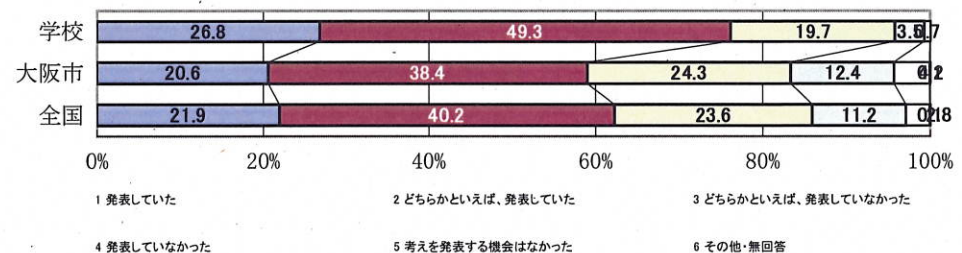
33

1、2年生のときに受けた授業で、PC・タブレットなどのICT機器を、どの程度使用しましたか



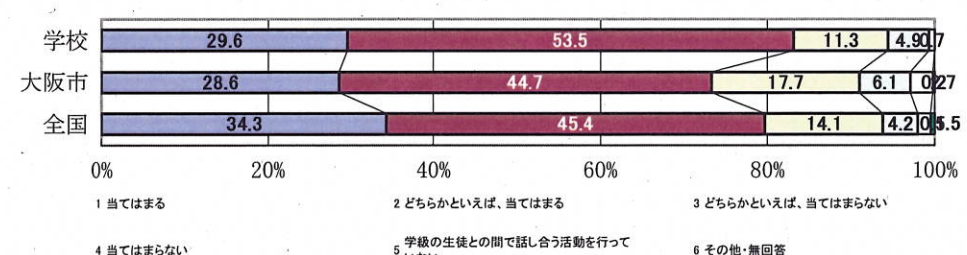
36

(1、2年生のときに受けた)授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表していましたか



40

学級の生徒との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか



令和5年度 平野中学校のあゆみ —結果概要とその分析から見えてきた成果・課題と今後の取組について—

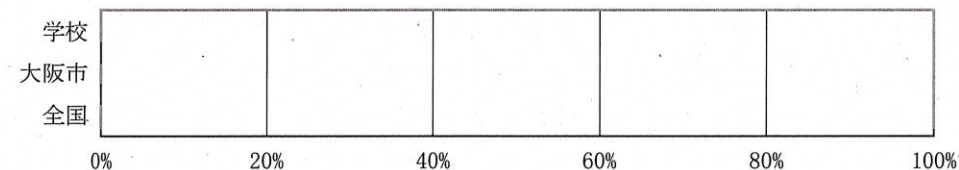
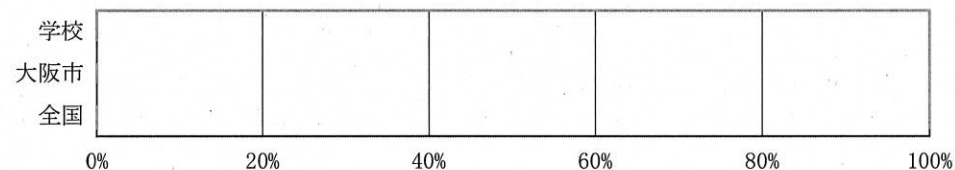
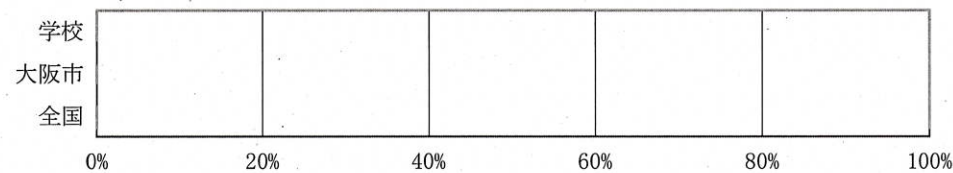
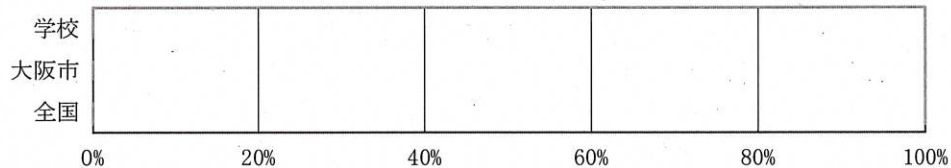
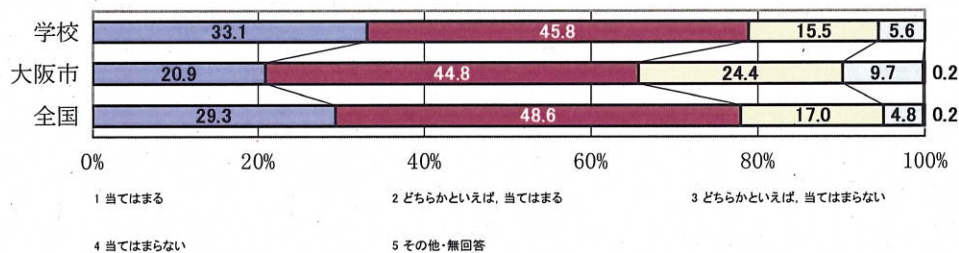
生徒質問紙より

1 2 3 4 5 6 7 8

質問番号
質問事項

44

あなたの学級では、学級生活をよりよくするために学級活動で話し合い、互いの意見のよさを生かして解決方法を決めている



調査結果から

中学生チャレンジテスト(1年生)、チャレンジテストPlus 結果

中学生チャレンジテスト、チャレンジテストPlus

成果と課題

【国語】

知識及び技能の分野において府平均を大きく下回る結果となった。漢字の読み・書きにおいては小学生時に学習した漢字が定着しておらず、無回答率が最も高かった。また、案内文の下書きの時候の挨拶として適切なものを選択する問題の正答率が低かった。今後は漢字学習の習慣の定着や定期的に便覧等を用いた国語知識や語彙を増やすための取り組みがさらに必要である。一方で文と文の意味のつながりを考えて接続語として適切なものを選択する問題や文脈から判断して文章の中でこういった意味で語句が使われているのかを解答する問題の正答率は高かった。今後も接続詞に注目して文章を読解したり、一語に注目して文章読解をする取り組みを継続していく。

【社会】

各領域において大阪市の平均を下回っている結果となった。地理的分野では、各地域における気候やそれに伴う住居や衣服、暮らしなどが関連付けられていなかった。歴史的分野においては、古墳時代までの正答率は比較的高かったが、飛鳥時代から平安時代の理解が低かった。また、両分野において複数の資料から情報を読み取り、それらをまとめ、記述することができていない、無回答率も高かったことが課題として挙げられる。まずは基礎的な語句を定着させていく必要があるため、小テストなどを通して知識を増やしていきたい。それらをもとにして、諸資料から必要な情報を読み取り、それらをまとめ、記述する授業をし、思考・判断・表現の能力を伸ばしていきたい。また、生徒同士での対話をする授業を通して、深い学びを実現できるようにしていく。

【数学】

計算力にまだまだ課題はあるが「数と式」の分野が最も正答率が高く小テストなど継続的に取り組んできた成果と考える。一方、最も正答率が低かったのは「関数」の分野で、基本の定着に向けて今後の授業で振り返っていく必要がある。また、無回答率は多くの問題において比較的低位だが、「思考・判断・表現」の観点の記述式問題においては無回答率が高く今後の課題として捉えている。

【理科】

ほとんどの領域において大阪市の平均を下回っている結果となった。成果としては基礎知識・基本的実験操作に重点を置き、何よりも授業規律に力を注いできたために、試験結果やアンケートからも科学的な知識や実験技術の習得、観察・実験に取り組む意欲等は醸成されつつあると考えられる。一方、課題としては、科学的な思考が必要とされる仮説形成能力の向上、さらには問題解決能力の育成があげられる。教科書や授業内容が抽象的であると感じさせる部分があり、生徒の興味を引きにくい点や、実験教材や設備の不足、また生徒の理解度や学習スタイルの個別差へ対応していく必要がある。これらの課題に対応するため、さらなる教材の工夫やアクティブラーニングの導入、そして生徒への細かな個別指導などが必要と思われる。

【英語】

各領域において、平均正答率は府の平均を下回っている。特に英文を読み取り、英文で答えたり、指示された語句を抜き出したりする問題や、会話の内容を汲みとり、正しく応答する問題の正答率が低かった。その場面に応じて表現する能力や英文読解力に課題がある。基本的な文法事項や重要語句の定着を図り、まずは読解力の向上を目指す。次に、場面に適した応答ができるよう「書く」「話す」能力を伸ばしたい。そのために、平易な表現や短文での応答から、まとまりのある英文を作ることに慣れさせる活動を増やす。また、簡単な英語でのやり取りを多く取り入れ、内容を理解し、答える力をつけさせたい。

調査結果から

中学生チャレンジテスト(2年生)結果

【国語】

基礎学力や読解力の向上のために授業で自分の考えをまとめる時間をとることや週1回の小テストを行うことを意識づけていたが、知識・技能は2.2ポイント、思考・判断・表現は1.5ポイント大阪府の平均を下回る結果となった。特に行書についての設問で府の平均よりも19.3ポイントも下回る結果となり、書写の知識についての定着ができていないのが課題である。毎週末の漢字課題や週に一回の漢字の小テストを行うことで漢字の定着を図ったが、言葉の特徴や使い方に関する事項では府の平均を0.5ポイント下回る結果となった。漢字の定着化については三学期以降は毎日漢字の小テストを行っているので、さらなる定着化を図るために継続していきたいと考える。また、読解力の向上のためグループワーク等で生徒同士の意見交換をすることで、図っていききたい。

【社会】

基礎学力定着のため、毎時間復習の時間を取ったものの、知識・技能は2.4ポイント、思考・判断・表現は1.9ポイントと、府平均を下回る結果となった。結果統計でみると、40～49点の生徒がともに12～14%を占めるということから、平均に5～10点ほど満たない生徒を上げることができなかった。記述問題に関しては、無回答率が30%以上を占めており、解答に対して消極的な姿勢が見受けられた。知識の定着は少しずつできているが、それを活用して、自分の考えを文章で表現することに課題がある。基本的な知識の定着のために单元ごとに小テストを行ったり、自分の考えを文章で表現できるようにレポートや1つの課題に対してペア、グループ学習を増やしていきたい。また、簡単な資料を毎授業ごとに提示するなど、興味・関心を引くことができる工夫をしていきたい。

【数学】

基本的な計算や図形の角度の問題などは2学期後半に毎時間復習の時間を取り、基礎の定着を図った。その結果、知識・技能の観点の問題については府の平均を1.3ポイント上回っていたものの、思考・判断・表現力の観点では府の平均を2.8ポイント下回ったため、文章問題や応用力を求められる問題に課題が残る。また、分野別にみると、「数と式」と「関数」の分野で府の平均を下回っていたため、これらの分野を重点的に復習していく必要があると考える。授業の中では、基礎の定着を優先したため複雑な文章問題や自分で説明する問題などの演習ができていなかった。そのため、今後は記述式の問題についても対応できるような力を身に付けていくことが求められる。まずは「数と式」「関数」分野の基本問題を反復学習で定着させる。計算問題や短答式の問題だけでなく、文章やグラフを読み取って考える問題に触れる機会を増やすことが必要である。また、解き方を他者に説明する力や文章化する力を身に付けさせるために、グループワークをより多く取り入れ、教えあい・学びあいの時間を確保したい。

【理科】

統計では45～49点を取得した人数が府平均と比較して多くなっていることから、平均に少し満たない生徒の学力を押し上げることができていると考える。実験等を積極的に行っているため、知識・技能に関しては、府平均に対して2.6ポイント上回ったが、一方で思考・判断・表現の能力に弱く、府平均より0.5ポイント下回った。記述式に関しても同様に0.5ポイント下回っていることから、授業や実験等で得た知識を表現する力に課題がある。短答式問題に強いが記述式問題に弱いので、実験の結果を他の班に向けて説明したり考察する機会を増やすのが急務であると考え。教室でも、現象の理解だけではなく、生徒が実験前にグループで仮説を立て他のグループに説明するなど工夫した授業を取り入れていきたい。

【英語】

昨年と比較して、読むこと、書くことの力がのびた。特に読むことにおいては昨年は正答率が49.8%だったが、今年は56.5%になった。(6.7%の上昇 府の平均は6%) 分割授業等で長文を読んだり教科書を使って英問英答の練習を繰り返した結果ではないかと思われる。その一方で書くことの正答率が昨年と比べて大きく下がった。(10.8%) 府全体も8.5%下がっているのを見ると、2年生になって英語が徐々に難しくなり英語を書くことが苦手になってきているのではないかと思われる。書くことの力をのばすために、自分の意見を英語で書いたり、反活動やペアーワークで英語で意見を交換して、レポートしたりする授業を増やしていきたい。またまとまった英文をたくさん読むことをとりいれ、定期テスト等にも出題をする。

調査結果から

中学生チャレンジテスト(3年生)結果

【国語】

毎授業での小テストや反復練習課題により、「知識・技能」の観点別問題における漢字や文法の範囲では、大阪府平均正答率と同等か上回る結果となった。しかし、全国学力・学習状況調査の結果と同様に記述式問題の平均正答率が低く、授業中の小テストや課題の問題形式に偏りがあり、生徒が短答式や記述式問題に不慣れであることが結果として表れている。今後は短答式や記述式の問題を解く機会を増やすとともに、ペアやグループでの話し合いや発表の事前課題として、自分の意見や考えをまとまりのある文章で表現する時間を確保し、生徒間の言語活動がより活発で学びの多いものになるよう工夫していく。また、長文読解等の実践的な問題にも取り組んでいきたい。

【社会】

今年度も大阪府の平均正答率を下回る結果となり、経年度比較すると年々大阪府の平均正答率との差の開きが大きくなっている。設問別では、第一次世界大戦中の対立構造や明治時代の労働事情に関する資料を活用する問題等、何度も説明した箇所や重点的に指導を行った内容に関する問題は、府の平均正答率を上回っており、習得した知識が定着していることがわかる。成果につながった指導を今後も継続して行うとともに、知識・技能の定着を図るため、小テスト等で定期的に学習内容を振り返る機会を設けていく。また、「知識・技能」を活用し「思考・判断・表現」の力を伸ばすため、单元ごとに学習内容の要点をまとめ、自分の考えをまとまりのある文章で表現する課題を設定していく。

【数学】

1年次、2年次は大阪府の平均正答率を超えていたが、今回は大阪府の平均正答率と同等であった。1年次から「関数」の単元を苦手としている生徒が多く、問題の意図を読み取り答えを導き出すことや、分数等を多くつかう計算が多いため誤答が多いと考えられる。また「データの活用」でも平均正答率を少し下回っており、授業やテストで扱うことが他の単元に比べると少ないことが結果に表れている。

「思考・判断・表現」の観点別問題では大阪府の平均正答率を少し下回り、記述を要する問題では大阪府の無回答率を超えている。問題文が長かったり、図や表から読み取り考えたりすることに苦手意識を持っている生徒がいて考える。普段の授業で「知識・技能」の活用に焦点を置いてグループ活動や記述を用いたレポート課題を行っているが、まだまだ力がついていないと感じた。「知識・理解」の問題では、無回答率が0の問題も多く、「数と式」、「図形」の単元ともに大阪府の平均正答率を超えているため、今後はその力をさらに伸ばすとともに、「関数」の単元の振り返りや「思考・判断・表現」の観点に重きをおいた单元末テストやレポート課題に積極的に取り組んでいきたい。

【理科】

全体として大阪府の平均正答率を下回っており、経年度で比較しても学習内容の定着に課題が見られた。ワークやデジタルドリル等を併用し基礎学習の定着を図っているものの、器械的に問題を解くことが多く、記述式問題や図やグラフを読み解いて正答を導く「思考・判断・表現」の力が身につけていないことがわかった。今後は、基礎的な学力の向上を目指し1問1答式の小テストを毎時間行っていくとともに、单元ごとに「知識・技能」を活用し、各自の思考・表現力が向上するようレポート課題を作成していく。

【英語】

領域別でみると「聞くこと」の力は大阪府平均正答率と同等であったが、資料や文章理解を併用した複合的な問題では平均正答率が非常に低かったことから、まとまりのある長めの英文を聞き取り、要点を正確に把握する力に課題があることがわかった。また、問題別では選択式の問題の正答率は大阪府と比較し大差ないが、記述式問題の無回答率が大阪府と比較すると高く、語数の多い対話文や長文に苦手意識を持つ生徒が多いと考えられる。難易度の低い問題であっても、文中で出題されると無回答率が高くなっている。適語補充や英文整序等の基礎問題を繰り返し、「知識・技能」の定着を図るとともに、まとまりのある長い文を最後まで読み、概要をとらえる力や文中で選択・短答・記述式の問題に対応できる力をつけていく。また、帯活動行っている読解を少しずつ語彙の多いものに変え、実践的な問題にも取り組んでいく。

調査結果から

大阪市英語力調査(GTEC)

【成果と課題、今後に向けて】

4技能において、リスニングとスピーキングは大阪市の平均スコアとほぼ同値であったが、リーディングは2.8ポイント、ライティングは3.5ポイント下回っていた。総合点では大阪市の平均スコアを6ポイント下回った。技能間のバランスでは、リスニングとスピーキング、リーディングとリスニングのバランスはとれているが、リーディングとリスニング、ライティングとスピーキングのバランスに大きな偏りがあり、受信技能に比べ発信技能に課題があることがわかった。単元や文法・表現の定着度を測り習熟度別授業を行っているが、各技能ごとに生徒の習熟度を測り、習熟度別クラスを編成し教材を工夫していくことで、各技能と技能間のバランスの向上を図っていく。

●リーディング

WPM50語未満の生徒が70%以上を占め、短い簡単な文章をいくつかの「意味のまとまり」ごとに区切りながら読むことはできるが、段落ごとの大意や文章全体の大まかな流れを読みながら掴む力が弱い。教科書の題材を使いパラグラフリーディングや要約する機会を増やすことで、文章全体の趣旨を掴む力を伸ばしていく。また、スコア成績の分布から3つのグループに分けることができるので、習熟度別に教科書以外の教材を精選し、読解の基本となる語彙力を増やすとともに速読力を上げていきたい。

●リスニング

問題別の正答率を見ると、イラストや写真(図表含む)など与えられた視覚的情報をもとに、ある状況や場面、事物を描写説明した短文レベルの英文を正しく聞きとる問題の正答率は全体の77%を超えている。しかし視覚的情報がなく、会話の不意の問いかけに対する適切な応答分を選択する問題では、その正答率は46%と低い。このことから英語での自然な会話に慣れていないこと、即興で応答する力が十分に備わっていないことがわかる。普段の授業において生徒間で英語を用いてやり取りする場面を増やすなど、教室内インタラクションを主軸に置いて授業改革を行う。

●ライティング

4技能の中で最も正答率が低く、全体の30%程度の生徒が無回答及び語数を満たしていないため無得点となっている。英文を書く努力をしているものの得点につながらない要因は、単語を正確に書けておらず基本的な語順のルールが定着していないことが挙げられる。語いや文法事項を反復練習として学習させるのではなく、音声と結び付けて単語を習得するフォニックスや生徒が理解しやすい順で文法事項を編成し指導するなど、指導法を工夫していく。40%程度の生徒は使える語いや文法は限られているが、1つのテーマで3文程度の英文を書く力がついてきている点は普段の授業の成果が表れていると考える。

●スピーキング

大阪市の平均正答率を僅かに上回っており、短文での問いに対して応答する問題では70%程度の生徒が正しい英文で話すことができています。このことから基本的な語や言い回しを使って、日常のやり取りにおいて単純に応答する力はあると考える。自分の考えに理由や具体例を挙げて話すことができる生徒が少ないため、帯活動等でのペアワーク等を通して、話す内容に補足説明を加えながら内容を豊かにする練習を増やしていく。全体を通して発音やイントネーションやリズムの誤り、不自然な間合いがあるなどの課題も明らかになったので、C-NETと結果を共有し、授業を通して英語らしい発音やリズムで話す指導の充実を図る。

調査結果から

全国体力・運動能力、運動習慣等調査

結果の概要

男子：

「運動やスポーツをすることは好きですか」の項目に対し、「好き」と回答した生徒が大阪市62.9に対して、学校63.2と上回っている、しかし、「やや好き」と合わせた肯定的な回答では全国、大阪市よりも下回っている。「中学校を卒業した後も、自主的に運動やスポーツをする時間を持ちたいか」の項目に対し、「思う」と回答した生徒のうち、男子は「友達と一緒に活動したいから」という回答が全国、大阪市よりも上回っている。生徒同士の横のつながりを大切にしている学年としての取り組みの一定の成果が出ているのではないかと感じられる。運動などを通して良好な関係性が築けているともいえるのではないかと。また、「思わない」と回答した生徒を見てみると、男子は「友達に誘われたらやる」という回答の数値が高い。1週間の総運動時間が60分未満の生徒の割合については、全国、大阪市よりも多い傾向にある。運動をしない、生徒が増加している傾向にあるのは、昨今のSNSやスマホ依存の影響が表れてきているのではないかと推測することができるのではないかと。

女子：

「運動やスポーツをすることは好きですか」の項目に対し、「好き」と回答した生徒が女子は大阪市、全国と比較しても下回っている。このことから、女子体育の重要性、女子は運動離れが気になるところである。「中学校を卒業した後も、自主的に運動やスポーツをする時間を持ちたいか」の項目に対し、「思う」と回答した生徒のうち、女子は、「体を動かすことが好きだから」の回答が、全国、大阪市よりも上回っている。「親に勧められるから」という回答は低い。それは、中学生として自立している証拠でもある。また、「思わない」と回答した生徒を見てみると、女子は「自分のペースで行うことができた」という回答の数値が高い。思春期における、男子との考え方の違いが反映されているのではないかと。1週間の総運動時間が60分未満の生徒の割合については、全国、大阪市よりも多い傾向にある。運動をしない、生徒が増加している傾向にあるのは、昨今のSNSやスマホ依存の影響が表れてきているのではないかと推測することができるのではないかと。

成果と今後取り組むべき課題

男子：

保健体育の授業において、ICTを活用をする機会を増やし、自らの身体動作の確認や新しい発見につなげる取り組みにおいて、生徒一人1台が持っているタブレット端末を活用し、自身の動きを確認することで、身体動作の確認や身体の動きについて新しい発見をすることができた。「ICTを使うことで、できたり、わかったりすることがありますか。」の項目においても、「いつもある」「大体ある」と回答した生徒が全国、大阪市よりも上回っており、ICT活用においての一定の成果が表れたのではないかと感じる。今後の課題として、実技の総合評価において、男子は、立ち幅跳びの数値が低いため、瞬発的な運動の体力要素を向上させることが必要である。保健体育の授業において、準備体操などでの授業構成を工夫していくことが今後の課題である。

女子：

保健体育の授業において、班活動を増やし個に応じたレベルでの活動時間を増やした。「運動やスポーツが好きですか」の項目について「好き」「やや好き」と回答した生徒が70%近くにいることから、個に応じたレベルでの活動の中で、目標を達成する喜びと自己肯定感が育まれていると感じる。今後の課題として、長座体前屈の数値が低いため、柔軟性の体力要素を向上させることが必要であることから、保健体育の授業においては、準備体操などでの授業構成を工夫していくことが今後の課題である。また、「ICTを使うことで、できたり、わかったりすることがありますか。」の項目について「いつもある」「大体ある」と回答した生徒が全国、大阪市よりも下回っていることから、単元ごとに調べ学習や実技だけでなく保健分野でも活用していく必要があるのではないかと感じる。